

12月



園だより

平成28年11月28日

佛教大学附属幼稚園

菜の花畑から

園長 藤堂俊英

毎冬、寒咲の菜の花を育てています。成長した苗を、年を越してから幼稚園の菜園にも移植し、子どもたちに春近しの姿を見てもらっています。正岡慧子『ぼく、まってるから』という絵本を紹介します。ある春の日、真っ黄色な菜の花畑の中で、くま君とねずみ君が出会い友だちになります。二人を結びつけたのは、ねずみ君の「ここでなにしてるの？」という問いかけに、くま君が「ぼく、なのはながだいすきなんだ。だって、はるのいいにおいがするんだもの」と応えた会話でした。一緒に遊んだ春・夏・秋が過ぎ冬が近づいた時、くま君は冬眠に入ります。すっかり元気を失くしたねずみ君でしたが、春の再会を待つ間、くま君のおうちの前に菜の花の種を蒔き、「ゆきがとけたらまたあえる。はるがきたらまたあえる」とつぶやきながら一生懸命に育てたのです。一方くま君は、夢の中で「くまくん、いっぱいねむっていいよ。ぼく、まってるから、ぼく、まってるから」というねずみ君の声を聞くのです。雪が解け長い眠りから覚めたくま君は、おうちの前に広がる菜の花畑の中で、またねずみ君との春を始めるのです。花や実は月日をかけなければめぐり会えない根から生まれる成果です。目の前を通り過ぎるつかの間の楽しみばかりを追っかけるのではなく、待つという根張りからは、花や実のように、お互いが心底から喜び合える開花や結実が生まれることをこの絵本は伝えています。

さて菜の花にまつわる歴史小説に司馬遼太郎の『菜の花の沖』があります。江戸時代後期、貧農の子として生まれた高田屋嘉兵衛は船乗りを志し、やがて国内屈指の廻船問屋となります。函館の漁業基地や北洋航路を開拓し、日露関係にも尽力します。晩年は故郷の淡路島に帰り郷土のために尽くします。小説はそこを次のように描いています。「菜の花は昔のように村の自給自足のために植えられているのではなく、実を結べば六甲山麓の水で水車を動かしている搾油業者に売られ、そこで油となって諸国に船で運ばれる。たとえば遠くエトロフ島の番小屋で夜なべ仕事の網繕いの手元をも照らしている。その網で採れた魚が肥料になって畑に戻ってくる。わしはそういう廻り舞台の下の奈落にいたのだ」。

そういえば寒苦を乗り越え春を告げる菜の花は、まるでエンドレスのようにはたらき続けます。「種」という字は「禾」へんに「重」と書きます。小さくともずっしりと重みのある可能性を秘めた種。そのような心意気を秘めた種を、ねずみ君のように丁寧に育てて行きたいものです。

